

地域の再発見が

新しい観光を生み出す

地域にとって大きな意味を持つ観光。観光客の意識が変化する中で、地域が新たな観光と交流を実現する可能性と、その視点を語っていただきます。

地域も観光を柔軟にとらえ始めてきた

地域づくりにとって、観光の役割は変化していますか。

西村 観光に直接携わっていない人たちがまちおこし、地域づくりのひとつのツールとして観光を真剣に考えるようになるなど、大きく変化しています。少し前まで、観光というと旅館や土産品店、観光施設といった観光業界にだけ関係するもので、農業やまちおこしなどに取り組む人々には無関係だと考えられてきました。むしろ、地域の切り売りであるとか、地域にゴ

ミを残すだけといったマイナスイメージが大きかったといえます。しかし、今はそうではなく

なりました。自分たちの地域を訪れてくれる人たちとの交流の大切さを深く認識し、自分たちもそういう人たちのパートナーになれると積極的にとらえるようになったのです。もつといえ、都市と農村はお互いに補える関係だと考えるようになりました。全国的に有名な観光資源がなくても、今のままでも魅力がアピールできるし、それによって他の地域の人々たちとつながれると考え出してきたのです。このように、観光そのものを柔軟にとらえ始めてきたこと。こ

れが大きな変化であると思います。

地域での生き方も観光資源になっている

「地域の魅力」についての考え方はどうでしょうか。

西村 地域の魅力は観光には不可欠ですが、魅力そのものについての考え方も変化しています。これまでは、名所旧跡や温泉などが観光の魅力である、つまり観光資源であると考えられてきました。しかし、社会の成熟化とともに、何もないことも魅力のひとつとなりうるように

なってきたのです。地域の人たちが自分たちの生活に自信を持てば、暮らしそのものが地域の魅力となり、都市から多くの人々たちを引き付けるような時代になってきたのです。例えば、今年の7月に世界遺産に登録された島根県の石見銀山では、地元の女性たちを中心としたグループが自分たちの生活をひとつの文化としてとらえた活動を展開しており、そこで生まれた商品は東京などの大都市でも大きな支持を集めています。私はそれを、自分たちのライフスタイルをプレゼンする「ライフスタイル産業」あるいは「生き方産業」であると

呼んでいます。このように、地

域に対して自信を持った生き方は観光においても大きな可能性を持っているし、それこそサステイナブルな観光のひとつだと思います。

自分たちで楽しみ、創意工夫を重ねる

地域の生き方なども魅力的な

「観光資源」になりうるということですが、そこで大切なことは何でしょうか。

西村 まず、自分たちが楽しむことが重要だと思います。最近では地元の食に対する関心が高まっており、各地を歩いてみると、地元の食材を使った手打ちそば店や小さなお饅頭屋さん



多くの若者たちを魅惑している、伝統的な石見神楽 (写真提供: 島根県益田市)

どが増えています。にぎわっているお店の人たちから話を聞いてみると、本物を本気になって追究したい人とか、自分が好きだから作っているという人が多いです。ある意味では、自分の趣味で商品を作っており、これでいくらか儲けようといった気持ちだけではありません。お店に来ていただいたお客さんとどれほどの交流ができるか。そのことに強い関心を抱いているのです。これはイベントやお祭りなどについてもいえます。イベントやお祭りは誘客という点では大きな力を持っていますが、これだけではとあきられてしましますし、継続するには相当な資金力が必要です。しかし、最近では神楽などの地域のお祭りが見直され、それを楽しむために帰郷する若者も増えていきます。そうしたお祭りが元気になっていきます。そこには、単なるイベントにはない、地域の蓄積のよ

うなものを感じられますし、自分たちのための祭りを自分たちで楽しもうという気持ちも伝わってきます。他の地域からのお客さんのために開催するものがイベントであるとすると、こうした元気な祭りは自分たちが楽しむものであり、その結果として観光客にとってもエンターテインメントになっているのです。その意味では、サステイナブルな観光のひとつといえます。それとともに、常に創意工夫して魅力的なものにしていくことも重要です。例えば、神楽などにしても、単に伝統を守るだけでなく、創意工夫をすることによって神楽社中同士の競争が生まれ、神楽全体の魅力が高まってくると思います。社中の一体感も盛り上がってきます。こうした新しいものを生み出していくエネルギーを大切にすることも、これからは必要だと思います。

農村風景も大きな可能性を持っている

小さくても魅力的な観光資源が大切だといえますね。

西村 これまでの日本の観光は、全国的に注目される観光地にドット観光客が集中するというパターンがほとんどでした。そのため旅館やホテルは増改築を繰り返さなくてはならなかつ



にしむらゆき お
西村幸夫
東京大学工学部教授

たし、交通混雑を防ぐために道路の拡幅や駐車場の確保などもしなければなりませんでした。それだけ大きな投資が必要だったのです。しかし、さきほども言いましたように、日本には小さくても磨けば光る魅力的な観光資源がたくさんあります。そうした観光資源をネットワークすることも新しい観光になってくると思います。例えば、農村を歩いてみると、棚田など美しい風景がまだまだ残っています。地元の人たちにとっては当たり前の風景で、観光の魅力などないと思うかもしれませんが、それを美しいと感じる観光客は着実に増えていきます。その点で、農村は大きな可能性を秘めているし、それを見直すことによって新しい観光を生み出せると思います。

新しい観光は豊かな時間を提供する

そうした新しい観光を生み出すときのキーワードとしては何が挙げられますか。

西村 発想を変えれば、新しい

観光がいろいろ生まれれてくると思います。特に大切なのは豊かな時間を提供するということではないでしょうか。これまでは、どれだけ多くの観光客を誘致し、どれだけ多く地元で消費してもらったかを考えてきました。しかし、サステイナブルな観光を考えると、お金を落とすという行為は、むしろゆっくりと時間を過ごしてもらうことが大切になっていきます。農村の風景にしても、それを眺めるだけでは地元にお金は落ちません。しかし、長い時間をそこで費やし、地元の人たちとの交流を楽しみ、さらに何度も訪れるようになると、結果的には大きなお金を落とすしてくれることになります。そうした長期的な視点も必要だと思っています。また、アクションも大切なキーワードです。これまで観光客には観光地に行けば何か名物があるかも知れないという意識がありました。しかし今は、あのお店に行って手打ちそばを食べる、あの窯に行って焼き物を買うといったアクションを最初から組み入れて観光を楽しんでいます。観光行動が大きく変

化しているのです。ということ。は、地元がそれだけの情報を観光客に提供することが必要です。それは、地元の人たちが地域の魅力や個性をどれだけ見出せるか、いかに情報発信できるかということでもあります。そういう意味でも、サステイナブル

な、新しい観光を生み出すためには、地域の人たちがもう一度地域を見直し、観光客の意識の変化を考えながら、新しい地域の魅力として発信していくことが必要だと思えます。

(インタビュー：構成／城市創)



美しい風景で多くの観光客を引き付ける輪島市の千枚田(写真提供：石川県輪島市)

プロフィール・西村幸夫(にしむら・ゆきお)

1952年生まれ。東京大学工学部教授。東京大学大学院修了後、明治大学助手、東京大学助教授を経て現職。国土審議会特別委員、文化審議会専門委員なども務めています。著書に『歴史を生かしたまちづくり』『町並みまちづくり物語』などがあります。